

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	SIR ORFEOの構成と意味
Sub Title	Sens et Structure de "Sir Orfeo"
Author	厨川, 文夫(Kuriyagawa, Fumio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.231- 247
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0231

SIR ORFEO の構成と意味

厨 川 文 夫

I MARIE DE FRANCE の *Lais* と中世英文学

Marie de France が *Lais* を作ったのが、イングランドであったか、フランスであったかについては異説がある。しかしいずれにしても、Marie の在世中からこの女流作家の *Lais* が、イギリスで人気があったことは、Denis Piramus 作の「聖エドモンド王伝」(一七〇—一八〇年頃作) に記されたところ (*La Vie Saint Edmund le Rei*, vr. 35-48) によって明かである。また Marie の *Lais* 十篇のすべを合み、Prologue をも含んだ写本 (MS. Harl. 978, fol. 139^v-181^v) は、現存する Marie の *Lais* の写本のうちで最も完全なものであるが、これは十三世紀中葉のもので、⁽¹⁾アングロ・ノルマン方言で書かれている。このことは、この写本がイングランドで書かれたと推定せしめるものである。別に Marie の *lai* としては、*Lanval* だけを含む写本も、イングランドで十三世末に書かれてゐる。この写本 (MS. Cotton. Vespasian B. xiv) には、*Lanval* のほかに Marie の作品 *Fables* も入っている。⁽²⁾また Marie de France およびその他の *lais* が、十三世紀に Haakon 王 (たゞん Haakon Haakonsson, 1217-63) の命によつて、スカンジナビア語に訳せ

ているが⁽³⁾、それはイングランドで書かれた写本を底本にしたと考えられている⁽⁴⁾。これらの事実はすべて、イングランドで Marie の *Lais* が、さかんに読まれ、写されていたことを示唆している。

英語で書かれた文学の中に Marie の *Lais* の影響がみとみられるのは、十二世紀の末に書かれた *The Owl and the Nightingale* が最初であろう。梟がナイティンゲイルを攻撃する言葉の中(一〇四九—一一〇行)で Marie の *Lais* の中の一篇 *Laustic* の話を引用してゐる⁽⁵⁾。

また一三〇〇—一三二五年ごろ、イングランド北部で書かれた *Cursor Mundi* の冒頭に、当時のイギリス人の好んだロマンスの主人公たちを列挙してゐるが(一一二〇行)⁽⁶⁾、その中に Ionek の名が見える(一九行)。⁽⁷⁾ これは Marie de France の *Lais* の一篇 *Yonec* の主人公である。

Marie の *lai* の英訳が、十四世紀の初めごろに *Le Fresne* を訳した *Lay le Freine* が現われてゐる⁽⁸⁾。 *Lannal* の英訳 *Sir Landevale* の現存の写本 (MS. Rawinson C 86) は、十五世紀後半に写されたものにはすぎないが、その原本はおそらく十四世紀に溯るものと扱われる。これはフランスの八音節詩句対連を模倣した short couplets の詩形になつてゐる。十四世紀後半に Thomas Chestre は、この *Sir Landevale* とつ、フランスの作者不詳の *lai breton Graelent* とを併せ用らつて *Sir Lannfal* を作つてゐる。

Marie de France の *Lais* が、中世英文学に及ぼした影響は以上に止むべきものではない。 Marie の *Lais* 影響を直接うけた *Lay le Freine* や *Sir Landevale* のほかに、間接の影響をうけた *Sir Orfeo*, *Sir Degaré*, *Emaré*, *The Erle of Tolous*, *Sir Gauther*, Chaucer の *The Franklin's Tale* がある。前にあげた *Sir Lannfal* も、この部類に入る。これら Middle English (以下 ME と略す) の Breton lays のうち、詩形として、フランス語の八音節詩句対連の形に対応する short couplets の形を保存してゐるものは *Lay le Freine*, *Sir Landevale*, *Sir Orfeo*, *Sir Degaré* のみである。 *Emaré*, *Sir Gauther*, *Sir Lannfal* (MS. Cotton Caligula A. II), *The Erle of Tolous* は、 *adobchdabeeb* の脚韻組織をもちた十二行の tail-rhyme stanza の形になつてゐる。この tail-rhyme stanza の詩形はロマンズを書くことでは、ME では、十四、十五世紀に East Midland 特は East Anglia を中心として流行したものであつた⁽⁹⁾。 Chaucer の *The*

Franklin's Tale の詩形は heroic couplet である。Chaucer は、*Marie de France* の *Lais* を直接には知らずに、*The Auchinleck MS.* に含まれた Breton lays、特に *Sir Orfeo* と *Lay le Freine* などによつて Breton lays の様式を学び、話材の方は Breton lays に拠らちに、イタリヤの Boccaccio の *Il Filocolo* の「恋愛問題」(questioni d'amore) 中の第四の話(散文)に拠り、人名の一部は Geoffrey of Monmouth の *Historia Regum Britanniae* から採り、巨匠を移す話もこれから採つたと推定される。⁽¹⁴⁾ Chaucer は、*The Franklin's Tale* にこつた Prologue は、チャマーサーの Breton lays に関する知識を示している。

Thise olde gentil Britounis in hir dayes

Of diverse adventures maden layes,

Rymeyd in hir firste Briton tonge;

Whiche layes with hir instrumentz they songe,

Or elles reddem hem for hir plesauce,

and oon of hem have I in remembrance,

Which I shal seyn with good wyl as I kan.

(Chaucer, *The Franklin's Prologue*, F 709-15)

この言葉は、J. ZUPITZA ⁽¹⁵⁾ Marie de France の *Lais* の方々に出る *lais bretons* に関する記述を集めたものだというのが、しかし Chaucer は、LAURA HIBBARD LOOMIS の一連の研究が明かにして下さつた、*Auchinleck MS.* を読んでいたらしい形跡があり、この写本の中の *Lay le Freine* と *Sir Orfeo* とは、Breton lays 一般に関する記述が Prologue のやうにして、話の前にしてある。Chaucer の *The Franklin's Prologue* に使つたことは、*Chaucer* の二篇の *ME Breton lays* の Prologues に同じである。しかも、後に述べるが、Chaucer には *Sir Orfeo* から、他にも影響を受けていると思われるところが幾つかある。それはやがて本論の主題を考察する際に残つておかなばならぬ。そこで、このやうに *Auchinleck MS.* 所収の *Lay le Freine* と *Sir Orfeo* を

Chaucer が読んでいたとするならば、これらの Prologues には、Breton lays の記述が、Chaucer の *The Franklin's Prologue* 中の Breton lays に関する記述の拠り所となったものだと推定する方が、ZURITZA の前述の推定よりも蓋然性が高いであろうことを言っておきたい。

II Sir Orfeo とフランス語で書かれたその原拠

Sir Orfeo にはフランス語の原拠があったと推定される。フランス文学の中に、十二世紀の後半から、十四世紀にかけて、*Le lai d'Orpheus* とする作品をあげてくるものがある。*Floire et Blanceflor*, *Lai de l'Espine*, *Lancelot (en prose)*, *Romans des Sept Sages*, *Guillaume de Machaut* などである。⁽⁸⁾しかしこれらは言及のみであって、フランス語の *Le lai d'Orpheus* の作品そのものは現存しない。従って ME の *Sir Orfeo* がどの程度にフランスの原拠の面影を保存しているかという事は、断言できない。*Sir Orfeo* には、フランス語の語句をそのまま、用いているところがある。たとえば、Thrace の代りに、フランス語の形容詞の男性主格の形 *Traciens* (四七行、五〇行)を用い、フランス語の原拠ではおそらく *vair et gris* となっていたのを *pe fowe and gris* (l. 241) として次の行の *biis* (= *fine linen*) と脚韻を踏ましめるためにフランス語の *gris* (= *grey* [fur]) を残したり、またフランス語の 'en exile' (l. 493) の句を英語の詩句の中に入れていたりしている。そのほか「壕の中から扶壁が出て来た」(*pe butras com out of pe ditch*; l. 361) という描写が妖精の国の城のところに出るが、*butras* は 'flying buttress' (飛び控え) であり、これは十三世紀にはイングランドでは、ほとんど知られていなかったが、フランスでは当時すでに教会建築の著しい特色となっていた。したがってこれはイギリスの作者の創作ではなくて、フランスの原拠から取り入れた描写ではないかと考えうる。また *Sir Orfeo* とか *Damle* *Heurodis* (ll. 52, 63, 322, 406-594) のように *Sir* や *Dame* の称号をつけることも、フランスの原拠の影響とみられぬことはない。

しかし他面 *Sir Orfeo* の作者が、フランスの *lai breton* になかった要素を入れているのではないかと考えられる箇所もある。たとえば *Orfeo* は妻の *Heurodis* を、妖精の王に奪い去られて、悲嘆のあまり、貴族、諸侯を召集して、皆の面前で家老を摂政に任じ、自

分は荒地へ行って獣たちと暮すつもりだという。「もし自分が死んだと聞いたら、議會 (a parliament; l. 216) を開いて、新しい王をせらるゝ」(ll. 215-216) となっている。Orfeo は、ここでは、立憲君主政体のイギリスの王と同じやり方をとっていることになる。

またフランスの *lais bretons* には男女の愛を扱ったのが多いことは言うまでもないが、それが夫婦間の愛を尊重したものであることは殆どなかったようである。失われた *Le lai d'Orphée* にそれがあつたか、疑わしい。ところが ME の *Sir Orfeo* に現われたところは、Orfeo 王と Heurodis 王妃との愛のまことは後に述べるように、この作品の意味 (*sententia*) の一部になつてゐる。Chaucer が Breton lay の様式を用ゐて、*The Frankin's Tale* を書いた時、夫婦の愛の誠実が、他の人々をも 'gentillesse' へ向わせるといふ趣旨を表わすようにしてゐる。妻に横恋慕した Aurelius は自分の欲望を棄て、魔法使の哲学者も約束の謝礼金を辞退する。Chaucer の *The Frankin's Tale* の ME の *Sir Orfeo* といふれも Breton lay として作られ、夫婦の間の愛のまことを強調し、讚美してゐる。Chaucer が *The Auchinleck MS.* を読み、この写本に含まれた Breton lay の影響をうけたと推定されることは、前節での述べたが、ここにもまた *The Auchinleck MS.* 所収の *Sir Orfeo* の *The Frankin's Tale* との共通点がみとめられるのである。明かにイングランドで変更されたとわかることは、*Sir Orfeo* の三種の現存写本のうち、*The Auchinleck MS.* のみに見られるものである。すなわち Orfeo をイングランドの王と見做す (ll. 25-26) Orfeo の住む Traciens を「当時はウインチェスタと呼ばれていた」(ll. 47-50) と述べてゐる。このことは、Orfeo が妖精の国から首尾よく王妃 Heurodis を取りもどして帰つてきたところである。「長久らいた歩みして、自分の城市ウインチェスタへ帰つてきた」(So long he hap þe way ynome, / To Winchester he is ycome, / þat was his owen cite; ll. 477-479) として前後の照応が配慮されている。これが *The Auchinleck MS.* の写字生自身の加えた変更、附加であるのか、またはその親にあたる写本によつたものかは明かでないが、たぶんウインチェスタ市に関係のある詩人が写字生がしたところである。

三 古典の物語と *Sir Orfeo*

古典の Orpheus と Eurydice との物語は、*Sir Orfeo* に至って全くちがったものになっている。古典の Orpheus は Thracia の詩人で、堅琴の名手であった。その妻 Eurydice は、自分に横恋慕して追ってくる Aristaeus の手から逃れて草地を走るうちに、毒蛇を踏み、それに噛まれて死んでしまった。Orpheus は Eurydice をとり戻すために下界へ行く。音楽の力で Persephone から Eurydice を連れ、地上へもどる許しを得るが、途中でけっして背後をふり向いてはならぬという条件が課せられる。生の世界へ近づいた時に、Orpheus はあとからくる Eurydice を見ようと振りかえり、永久に妻を失ってしまう。——この話は古代から、中世へ伝えられ、広く知られたものであるが、主要な経路は、Virgil, *Georgics*, VI, 454-527; Ovid, *Metamorphoses*, X, 1-85; Boethius, *De Consolatione Philosophiae* (87) III, met. xii であつたと考えられる。

Sir Orfeo では Orfeo の妻 Heurodis は死ぬのではなく、果樹の下にいたとき(七〇行、一八六行、四〇七行)美しい妖精の騎士王に無理に誘拐されてしまうのである。悲嘆にくれた Orfeo は、国王の権を家老に託し、自分は堅琴だけを携えて荒地を彷徨する。その悲惨な生活が、その昔の国王の華やかな豊かな生活と対比される(II, 235-264)。晴れた日に堅琴を弾くと、野獸や小鳥たちが集つて聴く。さまざまな幻影を見る。時には暑い朝に、妖精の王が一人の人々をつれて狩獵にくるのを見ることがある。幽かに人々の叫びや角笛の音がきこえる。獵犬たちも吠えている。しかし獸を捕えない。どこかへ消えうせてしまう。またある時は武装した百人もの屈強な騎士が旌旗をなびかせ抜劍して通りすぎるのを見る。またある時は、騎士や貴婦人たちが、優美な装いをして、巧みに音もなく踊りながら進んでくる。小太鼓、ラッパ、あらゆる種類の音楽がその傍を進む。ある日、Orfeo は、自分の傍を六十人の貴婦人が馬に乗って河のほとりで、鷹狩りをするのを見た。野鴨、青サギ、鶺鴒など夥しい獲物がある。水鳥が飛び立つ。鷹がすぐ見つけて殺す。Orfeo はそれを見て声を立てて笑った。「これはすてきた。昔はわしもこういふのを見たものだ」。Orfeo はやがてこれらの貴婦人の中に、自分の失われた妃 Heurodis を見つける。妃も彼を見つめるが、二人とも口をきかない。妃は Orfeo の苦悩にやつれ果てた姿を

みて、涙を落す。他の貴婦人たちがそれを見て、妃を馬で連れ去る。Orfeo はなげく。「わたしには自分の妻に言葉をかける勇氣もなく、妻もわしに一言も言ってくれぬとは、わしの生命も長すぎる。どうしてわしの心臓は破れてくれぬのか。よし、何が何でもあの婦人たちの行く処へわしも行く。生きようが死のうが、かまったことではない」(三三四—三四三行)。Orfeo は順礼のマントを羽織り、ハーブを背に掛けると急いで貴婦人たちを追った。ある岩のところでくると貴婦人たちはその中へ入ってしまった。Orfeo もためらわず、そのあとから入った。三マイル以上も進むと、夏の日太陽の様に明るい美しい国へ出た。平坦な緑地で、山や谷は見えない。壮麗な城があった。外の城壁は明るく水晶のようである。不思議な形の塔が百も聳え、堅固な胸壁がついている。「扶壁 (Pe butras) が壕の中から突き出ているが、それはアーチ型で純金なのである」(三六一—三六一行)。——この美しい城の描写はまだつづく。この城中で、例の貴婦人たちは馬をおりた。Orfeo は扉をたたき、出てきた門番に向って、「わたしはご覧の通り遊行詩人なのです。御殿様の御意があれば、わたくしの音楽でお楽しみ頂きたいのです」。門番は扉を開いて Orfeo を城中へ入れた(三八二—三八六行)。

この次に出る描写は Dorena Allen が “Orpheus and Orfeo: the Dead and the Taken” とする論文 (1964) の中で、ケルト人の「死」に関する妖精信仰がこの作品を解釈する鍵だとしているものである。私は後段で ALLEN の見解について述べ、私の解釈を提出するつもりである。ここでは再び問題の描写へもどる。

Orfeo が城の中を見まわす。——

And seige ful liggeand wipin pe wal

Of folk pat were pider ybrougt,

and pougt dede, and nare nougt.

(ll. 388-390)

(そして見たものは、城壁の中に横たわっている人たちで、彼らはそこへ連れて来られ、死んだと思われているが、死んではないなかつたのである。)

その人たちの有様が、「ある者は……であつた」といふ *sum* …… and *sum* …… and *sum* …… の反復 (*repetition*) の修辭学的形式を用いて列挙されてゐる。——頭のない者、胴を貫かれた傷のある者、乱心して縛られてゐる者、武装して馬に乗っている者、食事中に窒息している者、水中に溺れている者、火に焼け縮れてしまつたもの、座褥の女の死んだのや気が狂つたもの、そのほか夥しい人が横たわつてゐた。「その人たちは午前半ばに眠つていた姿そのままであつた。みなこの世界へ連れてこられた。妖精の術によつてここへ来たのであつた」(*Rigt as pai slepe her vnder tides./Eche was pus in pis ward ynome./Wip fairi pider ycome ; Il 402-404*)。

Orfeo はそこに自分の妻 *Heurodis* が、その昔午前半ばに果樹の下で眠つて、妖精の王に連れ去られた時そのままに、果樹の下で眠つてゐるのを見たのである (四〇五—四〇七行。六五—七二行と比較せよ)。

Orfeo は妖精の王のいる大広間へ行き、王に向つて、自分は貧しい音楽師で、自分の音楽をお聞かせしたいという。王は、自分が呼びもしないのに自分の宮殿を訪れた者はこれまでにない、と訝しむが、Orfeo は自分が *Heurodis* の夫であることは秘して、貧しい音楽師の風習として諸方の君主を訪問し、音楽をお聞かせいたすものですといつわる。そして王の前に坐つてハープを弹奏すると、宮廷の者らはみな集つてこの美しい音楽に耳を傾け、妖精の王も王妃も大いに楽しむ。音楽が終ると、妖精の王は、「何なりと望みのものを返礼に取らせるから、申してみよ。」という。Orfeo は、「果樹の下に眠つてゐる美しい貴婦人を頂きとうございます」と言つた。妖精の王は、「それはならぬ。お前は瘦せて、髪もひげも汚く乱れてゐる。あの女は汚点ひとつない美しい女だ。お前が連れで見えるに堪えぬだらう。」と拒絶する。しかし Orfeo は、次のように答える。この返答は、私のこの作品の解釈にとって重要であるから、原文で引用する。

'O sir,' he seyð, 'gentil king,

þe'te were it a wele fouler þing

To here a lesing of þi noupe'

So, sir, as þe seyð noupe,

What ich wold aski, haue y, schold,
And nedes pou most pi word hold.

(Il. 463-468)

(彼は言った。「おゝ高貴な王さま。しかしあなたさまともあろうお方のお口から、嘘を承^{うけた}わる方が遥かにもっと厭^{いと}わしいことごとざりましょう。されば殿よ、ただいま仰せの通り、私の望むもの何たりとも頂戴いたすことになっていきますから、どうしてもお約束はお守り下さらねばなりません。」)

すると妖精の王は、「そついうことなら、あの女の手を取って連れて行け。あの女と楽しく暮せ。」と言って、無^む条件^{じょうけん}で、HeraodisをOrfeoに返^{かえ}す(王は返^{かえ}したつもりではない。Orfeoの正体を知らずに与^よることになっている)。古典の物語の場合のように、背後を振り返^{かえ}るならば Eurycle が永久に失^うれるというような条件はつけないのである。Orfeoは難^がなく妻^{つま}を取りもどして、故国へ帰^{かえ}る。

このあと(四七七行以下)に古典の Orpheus の物語には存在しなかつた話がつづく。これは決して蛇足ではない。Sir Orfeoの構成と意味にとつて不可欠な部分であると私は考える。そのことは後段で論^{ろん}じることにして、話のつづきへもどることにしよう。

Orfeoは妻を連れて自分の城市へもどつたが、町はずれから先へは行^いかなかつた。人に知られたくないからである。乞食の狭い家に、貧しい遊行詩人のふりをして泊^{とど}めてもらい、この国の様子をたずねた。乞食は、十年前に王妃さまが妖精の力で盗^{ぬす}み去^さられ、王は流浪の旅に出^でられて行方しれず、家老がこの国を治^さめていることなど、こまごまと告^つげた。(四七七—四九六行)

翌日の正午ちかく、Orfeoは妻をそこに待^{まち}たせて、乞食の着物を借^かり、背中に堅琴をかけた姿で城市へ入^いつた。貴族や町人、貴婦人たちは彼を眺^{なが}めて、「何て人だろう。髪は伸び放題、あごひげは膝まで垂^たれているのではないか。瘦^うせひからびて木^きのようだ。」(四九七—五〇八行)

町を歩いて行くうちに家老に会^あつたので、呼びかけた。「御家老さま。おねがいでござりまする。私は異教の国より参^まりましたる堅

琴弾き。困窮しておりますゆえ、お助けを。」すると家老はいった。「わしについてきなさい。わしのものを分けてつかわそう。わしの主君オルフェオさまのために、堅琴の名手は歓迎することになっている。」(五〇九—五一八行)

城中で家老をはじめとして、そのほかの諸公が食卓につくと、音楽師たちがみな演奏したが、Orfeoは大広間で静かに坐って聴いていた。みなが静かになったとき、彼は自分の堅琴をとって、音高らかに調弦し、人がこれまで聞いたこともない甘美な音楽を奏した。誰もが感心してしまった。

家老は眺めていたが、たちまち例の堅琴に気がついた。そして、どこで、どうしてその堅琴を手に入れたのかとたずねた。Orfeoは言った。「外国で荒野を歩いていました時に、谷間で一人の男が獅子に噛み裂かれ、狼が鋭い牙でむさぼり喰っているのをみました。この堅琴はその男のそばにあったのです。」家老は言った。「あゝ遂に悲しいことになった。その人こそわが主君オルフェオさまだったのだ。情ない。あのような御主人を失ってしまったわしは、どうすればよいのだ。あゝ、生きているのが辛くなる。あんなお方にむごい運命が定められ、そのような有様で相果てられたとは！」家老は氣を失って床に倒れた。(五三〇—五四九行)

オルフェオ王は、家老が「忠誠な男」(a trewe man: 536)であり、自分を愛しているのを見究めたので、立ち上って、自分がオルフェオ王であることを打明け、長い間荒地で苦勞を忍んだあげく、妖精の国から自分の妃を取りもどして、いまこの町はずれまできて、乞食の家に泊っていることを語り、「わしは身分を秘して賤しい身なりでひとりお前の所へきた。お前の善意を試みためであった。そしてお前がかくも忠誠であるのがわかった (and ich founde þe þus trewe: i. 569)。けっして残念がることはない。わしが死んだ後は、いずれにせよお前を国王にしてやるのだから。だがもしも、お前がわしの死を喜んだりしていたとすれば、忽ち追放の憂目にあったことであろうぞ。」(五五三—五七四行)

広間に坐っていた者たちも、家老も、これがオルフェオ王とわかり、食卓をひっくり返してオルフェオの前にひれ伏し、異口同音に主君と呼び、われらの王さまと呼んで、その生還をよろこんだ。すぐに王を部屋に案内して、風呂呂に入れ、頬ひげを剃り誰の目にも王者にふさわしい衣裳を着せた。それから盛んな行列を整えて王妃を城市の中へ連れてきた。あらゆる音楽の伴奏があった。まったくす

ばらしい音楽であった (Lord! per was grete melody! 590)。二人が恙なく帰還したのを見た人々は、眼に嬉し涙をうかべたのであった。こうしてオルフェオ王とその妃ハウロディス夫人 (Dame Heurodis) とは、改めて戴冠式を挙げ、その後ながく暮っていた。家老はそのあとで王となった。(五九三—五九六行)

このことあつて後、ブルターニュの竖琴弾きたちは、この世にもふしぎな出来事の次第を噂に聞き、これについてまことに心娛む短詩を作り、王に因んだ題をつけた。この短詩は「オルフェオ」と呼ばれている。この短詩はよろしく、その旋律は美しう (Gode is pe lay, swete is pe note; l. 602)。

このようにして、オルフェオ卿は苦難をきりぬけたのである。神われらみな安らかに暮すことを許したわんことを (六〇三—六〇四行)。

四 Sir Orfeo の構成と意味

以上の梗概は The Auchinleck MS. を底本にした KENNETH SISAM 校訂のテキストに拠ったものである。(23) この梗概でも明かなように、*Sir Orfeo* は、古典の Orpheus と Eurydice との物語とは、いちじるしく異なったものになっている。古典の物語では、Eurydice は死んで、下界へ去る。しかし *Sir Orfeo* の Heurodis は、午前の半ば (vndrentide; ll. 65, 402) に果樹 (ympe-tre; ll. 70, 407) の下で眠っているうちに妖精の王のために、妖精の国へ連れて行かれるのである。くわしく言えば、Eurydice は一度妖精の国へ連れて行かれ、壮麗な城市を光景を見せられた上で、自分の王宮へ連れ戻され、その翌日、同時刻に同じ場所で、Orfeo 王の騎士たちが嚴重に王妃を守護していたにもかかわらず、妖精の術によって連れ去られてしまふのである。Heurodis は「死んだ」のではなく、「連れ去られた」のである。DORRINA ALLEN は「死」ということについてケルト人のもっていた妖精信仰 (fairy faith) がこの変貌をひき起したのだと言っている。妖精の国は死者の国ではない。この国の住人は、現世から地上での姿そのままに妖精の国へ連れて行かれる。生きたままのこともあり、「死ぬ」という形で地上の人の眼に見えることもある。本来に「死ぬ」ということは殆どなく、大がいは「連れ

去られる」のだという。Orfeo は妖精の国で、自分の妻 *Heurodis* が果樹の下に眠っているのを見る。他の多くの人々が横たわっていたが、「その人たちは午前 halves に眠っていた姿そのままであった。みなこの世界へ連れてこられた。妖精の術によってここへ来たのであった」(四〇一—四〇三行)。「彼らはそこへ連れてこられ、死んだと思われているが、死んではいなかったのである」(三八九—三九〇行)。

十二世紀以前から、ケルト人の間にこのような信仰があったことは、*DORENA ALLEN* の論文に引用された諸例によっても明かであるが、*ALLEN* のあげていない有名な例としてアーサー王の死がある。*Wace* の *Le Roman de Brut* ⁽²⁵⁾ には、「アルチュールは、もし歴史にいつわりなしとすれば、身に瀕死の重傷を負い、おのが傷を癒さんのため、アヴァロン⁽²⁶⁾の国へ運んでもらった。今なおそこに居て、ブリトン人らは彼を待っている。」——*Laganon* の *Brut* ⁽²⁶⁾ にも、「ブリトン人らは今もお、彼が生きていて、アヴァロン⁽²⁶⁾の国に、あらゆる妖精のうち最も美しい者と住んでゐると信じてゐるのだ」と言っている。

古典の *Orpheus* と *Eurydice* の物語がケルト人の間に伝えられて、ブリトン人の竖琴弾きがこの話材を用いて短詩 (*Le lai d'Orphéy*) を作ったときの「死」が、妖精の王によって「連れ去られたこと」に変えられてしまったことは想像に難くない。

Walter Map の *De Nugis Curialium* の中に二つの同じ話材を扱った物語が出ているが、⁽²⁷⁾ブリトン人の間で、そのような変容を起した *Le lai d'Orphéy* と類似の物語が、十二世紀に、しかもブルターニュの騎士 (*Miles* [quidam] *Britannie Minoris*) とその妻の話として、存在したことを推測せしめるものである。——むかしブルターニュのある騎士が妻に死なれて長い間なげいていたが、ある夜大勢の婦人たちが淋しい谷間の奥^よにいる中に、自分の妻を見つけた。騎士は自分が埋葬した妻が生きているのを見て、自分の眼を信ずることができず、怖ろしく思ったが、亡霊でもかまわぬと、妻を捉えて戻り、幸福に暮し、二人の間に多くの子をもつけた (*De Nugis Curialium*, *Distinctio* IV, cap. viii; *Distinctio* II, cap. xiii)。

古典の *Eurydice* の死が、*lai breton* では、生きたまま、妖精の国へ連れ去られてしまったことになった根底に、ブリトン人の妖精信仰があったとしても、イングランドの *Sir Orfeo* の作者や聴衆や読者が、そのような妖精信仰を持っていたとは考えられない。十

四世紀のイギリス人はそのような物語をどう解釈したであろうか。十四世紀の詩人 Chaucer は、*The Wife of Bath's Tale* の冒頭で「ブリトン人たちがその偉業を語るアーサー王の昔の時代には、この国は妖精で満ちていて、妖精の女王は美しい仲間たちと、緑の草地でよく踊ったものです。しかしそういうことは昔の人の考えだと思えます。何百年も昔の話なのです」とバースの女房に言わせている。Sir Orfeo の作者も、当時の聴衆や読者と同様に妖精信仰など持っていなかったと推定してよい。DORNA ALLEN の論文は、古典の Orpheus and Eurydice の物語が、lai breton において、妖精の王に誘拐し去られた妻を、Orphéy が妖精国へ出かけて取りもどす話に変貌してしまつたことの説明としては、首肯するに足りる。しかし ME の Sir Orfeo では、Orfeo が Heunodis を取りもどした後に乞食に変装して、王権をあずけた家老の忠誠を見きわめ、再び王となる話が付け加えられている。ALLEN の論はこの構成を説明することを閉却しているのである。この附加の部分が、Sir Orfeo の構成にとつて不可欠な要素であると考えられることは、前に梗概の中で触れたが、ここで改めてその点を明確にせねばならない。

Sir Orfeo の冒頭で、Breton lays 一般についてのべた重要な Prologue (ll. 1-20) があることは前にのべた。——それによれば堅琴を伴奏とする lays に扱われる物語には、幸福や不幸や、歎びや笑い、裏切り、詐り、冗談、卑猥を扱ったもの、妖精を扱ったものがあるが、なかならずく愛を扱ったのが一番多い。「これらの短詩はブルターニュで書かれ、最初発見され作り出されたものである。その昔起つた変つた出来事 (aventures) を扱ったもので、ブリトン人たちは、それについて彼らの短詩を作つた。どこかで変つた出来事が起つたのを聞くと、彼らは堅琴を取り上げて短詩を作り、それに題をつけたのであつた。(131-140行)

この Prologue のあとに四行の連結部 (141-144行) がある。——「むかしから起つた変つた出来事をひとつだけお話しさせていただこう。どれもこれもというわけには参らぬので。立派な殿がた、お聴きあれ。これよりオルフェオ卿の話を申し上げます」(141-144行)。

作者は「むかしから起つた変つた出来事」(aventures pat han betalle; l. 21) と言っているのが、Orfeo 話材そのものは、むかしのものであるにせよ、作者はケルト人の妖精信仰などは持っていない。従つて妖精国へ Heunodis を連れ去るという意味も、人間世界で

の誘拐と同じ意味に解したにちがいない。妖精の王も人間の王と同様のモラルに支配されるものとし、作者と同時代のイギリス人の共感を呼ぶように、すべてを作り変えるのである。Orfeo は相愛の妻 Heurdis を、妖精の王のために妖術によって奪い去られたのであるから、Orfeo は当然、妻を奪回することに成功しなければ、この物語は、作者・聴衆いずれにとっても、不満足と感じられたであろう。誠実な愛がふみにじられ、主人公も、その妻も、望まぬ別離を妖術によって強いられたのである。相手は騎士の姿をしてはいるが、妖精の王である。絶望した Orfeo は、国王の地位をすてて、荒地を放浪し苦難のかぎりを忍ぶ。遊行詩人といつわって妖精の王に絶妙の音楽を聞かせ、音楽の力によって望むものを奪回する。妖精王は、醜惡な遊行詩人に美しい Heurdis を与えることを渋るが、Orfeo は、それに答えて、「貴き王」(gentil king: l. 463)たる者が嘘をつかれるほど嫌らしいことはない。約束を守り私の要求したものを頂戴したいと言い、妖精王も「そういう理由ならば」と、あっさり Heurdis を Orfeo に与えた上に祝福の言葉まで添えている(四七〇—四七一行)。高貴な王者たる者は、卑しき者に対しても約束を守らねばならぬ、という人間のモラルに妖精の王も支配されていると作者が考えているからである。かくして妖精の王によって破壊された第一の秩序は回復されたことになる。しかしまだ乱されたままになっている第二の秩序が残っている。すなわち Orfeo は妖精王に妻を奪い去られて、その結果絶望し、国王の地位を棄て、家老に国政を委託して、自分は乞食同然の有様となったのである。Orfeo が国王の地位に戻らなければ、秩序は回復されたことにならぬ。Sir Orfeo 四七七行以下の、地上の王国に於ける物語に対応するものは、古典の Orpheus の物語には存在しない。しかも Sir Orfeo にとってこの部分が必要不可欠であるとすれば、その理由は何か。妖精の王の行為が原因となって破られた第二の秩序の回復を作者が必要と考えたからである。摂政を委任された家老は、篡奪者とはならず、主君に対して真に忠誠であったことがこの部分で明かになる。Orfeo は国王の地位に戻り、Heurdis も王妃に戻る。かくして第二の秩序は回復されたことになるのである。その上、家老の忠誠は報いられて、Orfeo が亡きあと国王となるべきことを約束される。こうしてすべての秩序は回復された。作者が意図した意味 (sententia) を明かに示すためには、この王権回復の物語は附け加えることが必要不可欠だったのである。Orfeo が第一と第二の秩序回復のために繰返し用いた武器が竖琴であったということは、この作品の意味 (sententia) に関係があると思われる。Orfeo は妖精

の王の場合にも、家老の場合にも、貧しい遊行詩人として堅琴の絶妙な音楽を奏して、妖精の国でも地上の王国でも、すべての者の心を喜びで満たす。そこには争いや不満はなくなり、平和と秩序が現われる。Sir Orfeo は、夫と妻の誠実な愛、臣下の主君への忠誠が世界の秩序の重要な一部であることとをまとめ、秩序の象徴として音楽を尊重し讃美した物語詩であると考えることができるのではないかな。この詩の終りの一句「この短詩はよろしく、その旋律は美しい」(六〇二行)は Marie de France 以来の lais bretons の常套句であること⁽³²⁾、特に Sir Orfeo の終りにも「これは、異端で美しう感動を喚び起す力を持つ詩」⁽³³⁾。

Gode is pe lay, Swete is pe note.

- 註1 H. L. D. WARD: *Catalogue of Romances in the Department of Manuscripts in the British Museum*, Vol. I (The British Museum, 1883), pp. 408-415.
- 2 H. L. D. WARD: *op. cit.*, p. 14; KARL WARNEKE: *Die Fabeln der Marie de France* (Bibliotheca Normannica, IV), Halle, 1898, p. III.
- 3 R. KEYSER og C. R. UNGER: *Srrenglengleikar eta Liobabok: En Samling af Romantiske Fortællinger efter Bretoniske Folkesange (Lais)*, Christiania, 1850.
- 4 PAUL AEBISCHER in JEAN RYCHNER: *Marie de France: Le Lai de Lanval*, Genève, 1958, p. 104; KEYSER og UNGER: *op. cit.*, pp. VIII-IX.
- 5 ERIC GERALD STANLEY: *The Owl and the Nightingale*, London and Edinburgh, 1960, pp. 79-81; 131; 165-166; KARL WARNEKE: *Die Lais der Marie de France* (Bibliotheca Normannica, III), Halle, 1925, pp. CLIII-CLIV (R. KÖPDER).
- 6 RICHARD MORRIS(ed.): *Cursors Mundi*, Part I (EETS, OS, 57), London, 1874.
- 7 THOMAS C. RUMBLE(ed.): *The Breton Lays in Middle English*, Detroit, 1965, pp. 80-94.
- 8 厨川文夫、『Sir Lanval』の成立——比較文学的研究——『藝文研究』第一四一—一五合併号「西脇順三郎先生記念論文集」(昭和三八年一月)、pp. 4-15.
- 9 A. G. BLISS: *Sir Orfeo*, Oxford, 1954; K. SISAM *Fourteenth Century Verse and Prose*, Oxford, 1950, pp. 13-31 (*Sir Orfeo*). ㊦㊧ ㊨㊩ ㊪㊫ ME Breton lays ㊬㊭㊮㊯㊰㊱ THOMAS C. RUMBLE, *op. cit.*; Chaucer, *The Franklin's Tale* ㊲ F. N. ROBINSON (ed.): *The Works of Geoffrey Chaucer*, 2nd ed., Oxford, 1957, pp. 135-144 ㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿.
- 10 A. McI. THROUNCE: 'The Middle English Tail-Rhyme Romances', *Medium Aevum* III (1934), pp. 47-50.

